

おきて指導の手引き



公益財団法人

ボーイスカウト日本連盟

ち か い

私は、名誉にかけて、次の3条の実行をちかいます。

1. 神（仏）と国とに誠を尽くし**おきて**を守ります。
1. いつも、他の人々をたすけます。
1. からだを強くし、心をすこやかに、徳を養います。

おきて

1. スカウトは誠実である

スカウトは、信頼される人になります。

真心をこめて、自分のつとめを果たし、名誉を保つ努力をします。

2. スカウトは友情にあつい

スカウトは、きょうだいとして仲よく助け合います。

すべての人を友とし、相手の立場や、考え方を尊重し、思いやりのある人になります。

3. スカウトは礼儀正しい

スカウトは、規律正しい生活をし、目上の人を敬います。

言葉づかいや服装に気をつけ、行いを正しくします。

4. スカウトは親切である

スカウトは、すべての人の力になります。

幼いもの、年寄り、体の不自由な人をいたわり、動植物にもやさしくします。

5. スカウトは快活である

スカウトは、明るく、朗らかに、いつも笑顔でいます。

不平不満を言わず、元気よく、進んでものごとを行います。

6. スカウトは質素である

スカウトは、物や時間を大切にします。

むだをはぶき、ぜいたくをせず、役立つものは活用します。

7. スカウトは勇敢である

スカウトは、勇気をもって、正しく行動します。

どんな困難なことがあってもくじけずに、新しい道をきり開きます。

8. スカウトは感謝の心をもつ

スカウトは、信仰をあつくし、自然と社会の恵みに感謝します。

お礼の心で、自然をいつくしみ、社会に奉仕します。

はじめに

おきては、ベーデン・パウエル卿が示されたスカウティングの原理

- 神へのつとめ
- 他人へのつとめ
- 自分へのつとめ

に基づく日常行動の規範を、スカウトの少年たちが、よく分かり実行しやすいように示したものです。各国のスカウト連盟は、それぞれの国情に沿って、世界機構の規約に則って「ちかい・おきて」を定めています。

おきてを実践することは、ボーイスカウト運動が掲げる理想に向かって、訓育のプログラムを展開することにより、スカウトがよい市民となる基礎づくりになります。

おきて8項目の第一に、誠実をあげています。ベーデン・パウエル卿は、Scouting for Boysの中で、ちかいの最初に「私は名誉にかけて」と示され、それを受けて、おきての第一に「スカウトは信頼される人になります」と書いておられます。

信頼のもと、誠実であり、誠実こそスカウトの実践活動の原点です。英米をはじめとして各国の連盟でも、「スカウトは誠実である」とおきての第一に掲げています。

おきての最後は、感謝の心で結んでいます。感謝の心は、万物の恵みを受けて生きている人間が、神（仏）、自然や社会に対する感謝報恩の心であって、スカウト活動のまとめは感謝の心を捧げて、しめくります。

友情、礼儀、親切は、スカウトの真心が、外に向かって広く生かされた行動の姿であり、快活、質素、勇敢は、内に満ちているスカウト精神が働いて、明るく、朗らかなスカウトの行動としてあらわれるものです。

おきては、スカウト活動の中のセレモニーの一部でもなければ、ヤーンの説話で終わるものでもありません。すべてのスカウト活動の中で、スカウト一人ひとりの日常生活に関連づけて確実に身につくように導いていただきたいのです。

ベンチャースカウトおよびローバースカウトにあつては、その成長に応じておきての理解をより深め、実践活動の質が高められると共に、人間の力の限界と、人生の奥深さを感じるできるようになります。さらに、それを超えたより偉大なるもの、浄きものを求め、無限な存在としての絶対者に気づき、信仰を深め、意義ある人生を過ごせるようになります。

この指導の手引きは、指導者、特に隊指導者の方々の理解を得ることに重点をおいて、執筆しました。それぞれの項目について、具体的な展開のヒントとしたものは、主にボーイスカウト部門の指導者を念頭においた記述となっています。

スカウティングのすべては、「ちかい」と「おきて」の実践を基盤として進められる自発活動であることを理解されて、ご活用いただければ幸いです。

1.スカウトは誠実である

スカウトは、信頼される人になります。

真心をこめて、自分のつとめを果たし、名誉を保つ努力をします。

ねらい

スカウトは、信頼される人になるように努力することが大切です。何事をするにも真心をこめて、丁寧に行えば良い結果が得られ、多くの人から喜ばればかりでなく信用も増し、スカウトとして信頼を高め、名誉を保つことになるのです。

家庭、学校や地域社会の一員として、それぞれの集団の中で、与えられたつとめを誠実に果たすことによって、社会に有用な人となることを気づかせたいのです。

ヒント

1. 自らの言葉に責任を持たせよう。
 - (1) うそをつくことは、人からの信頼を裏切ることになりますので、適切な事例、または、物語などを引用して理解させます。
 - (2) その場かぎりのごまかしや、あいまいな発言は、他の人をまどわせ、迷惑をかけることになります。(1)と同様に適切な事例を示して指導します。
2. 与えられたつとめは、全力で取り組ませよう。
 - (1) 常に明るく、きびきびした態度で作業に取り組み、怠けず、一生懸命に努力することが、スカウトとして信頼を得る第一歩です。
 - (2) 自分の力を尽くしてつとめに励み、途中で投げ出さずにやり抜くことが大切です。何事も根気よく頑張って、これだけのことができたという自信と、喜びを持たせませう。
 - (3) 仕事を始める時は、先ず、自分の考え方をはっきりと決め、必要があれば、他の人に意見を求めて参考とし、よりよい方法を見つけ、一度決めたことはしっかりとやり通すようにさせませう。
3. 信頼されるように努めさせよう。
 - (1) 自分でできないことについては教えを請い、困った場合に助言を受けることは、経験を豊かにし、知識をより確実にすることになります。
 - (2) 相手の過ちや、裏切りにあっても、時と場合によっては、これを許す広い心で相手を立ち直らせ、同時に、自分の人柄を高める機会になります。

4. 家庭、学校や地域社会における立場を理解させよう。
 - (1) 家族の一員として、愛情と思いやりの心で自分のつとめを果たすことによって、明るい家庭が築かれ、家族の間に親密さが増すこととなります。
 - (2) 学校や地域社会の一員であることを自覚し、スカウトとしての義務を果たすよう励む態度が必要です。
5. 正しい判断力を身につけさせよう。
 - (1) ルールに従ってゲームをすることも、法を守る心を養うことにつながります。権利と義務の関係を正しく理解させ、日常生活の中で実践できるように努めます。
 - (2) スカウトたちが相談して決めたことは、多少、不安と思われることがあっても、彼等の判断にまかせて実行させることが大切です。指導者が予見できる事柄については、細かく注意を与えて見守ることを怠ってはなりません。このことは、スカウティングにおける大切な訓練の方法で、その積み重ねが判断力を養う糧となります。

まとめ

人が生きていくには、社会生活の基本として、自由と規律、権利と義務を正しく理解して、真心を尽くしてことに当たり、人との触れ合いを大切にすることです。

誠実を、おきての第一項にあげたのは、ちかいの第一条「神(仏)と国とに誠をつくし……」に通ずる意味のあることをよく分からせて、誠をつくす心構えが身につくよう指導されることを期待します。

2. スカウトは友情にあつい

スカウトは、きょうだいとして仲よく助け合います。

すべての人を友とし、相手の立場や、考え方を尊重し、思いやりある人になります。

ねらい

同じ制服を着ているから、スカウト仲間だというのではなく、スカウトの活動を重ねていくうちに、スカウトとして温い友情が生まれ、心のかよった交際ができるようになって欲しいのです。

スカウトは、相互の信頼をもとにして、互いに励まし合い、助け合い、忠告し合って、すこやかな心身の発達をはかり、友情の輪を広げたいのです。

友情の広がりには、先ず、身近な班の活動から始まります。信頼できる友を得ることは人生を豊かにし、幸福な毎日の生活につながるものであることを、スカウトとしての体験を通じて身につけさせます。

ヒント

1. ひとりでも多くの友を作らせよう。

- (1) ひとことでのあいさつから、互いにさわやかな気持ちになります。誰とでも、気軽に声をかけ合えるようにしたいものです。
- (2) 困っているときに、力をかりることができたら、それはうれしいものです。そのときのうれしさを忘れずに、他の人の力になってあげることが、人とのつながりを明るくし、深めることになります。

2. 班内の友情を育てよう。

- (1) 班は年齢の異なるスカウトが集まっていますが、班員一人ひとりが、任務を持ち、互いに励まし合い、助け合い、磨き合って、与えられた任務を確実に果たし、進歩向上するところに班活動の意義があるのです。
- (2) 作業を完成した喜びや、満足感を味わせながら、ひとりの力ではできないことでも、グループで力を合わせれば何事も成し遂げられることを体験させ、班活動の効果を理解させて班精神をたかめ、仲間意識を育てるのです。

3. 友をつくるチャンスを与えよう。

- (1) いろいろな問題を解決するために、互いに話し合い、協力し合って作業をする機会を多く設けて、役に立つ意見を出し合いながら、解決する方法を見出していく工夫が欲しいものです。

- (2) 引っ込み思案や、自己中心的なために活動になじめないスカウトには、指導者がよい相手を見つけて仲間に入れる糸口を与え、一日も早くスカウティングの楽しさを味わうことができるように努めます。
4. 異性との交際には、望ましいマナーを身につけさせよう。
- (1) 男女の特性を生かして、互いに敬愛し、協力し合う気持ちを育てます。
- (2) 年齢が高くなるにつれ、清純な交際を通じて互いの立場を理解させて、健全な異性観を身につけさせます。
5. 平等の意義を正しく分からせよう。
- (1) 相手を思いやる心づかいがあってこそ、正しい友情が育ちます。
- (2) どんなに親しいからといっても、スカウトと指導者、青少年と成人との間には節度ある接し方が必要です。
- (3) 敬語の使い方を正しく知り、教える者と学ぶ者との立場を明確にし、長幼のちがいも分からせませす。

まとめ

どのような人にも、何か良いところがあるものです。早くそれを見つけて、気持ちのよい交友ができるようにすることです。楽しい語らいを通じて理解を深め、互いの人格を尊重することを学ばせませす。

自分の考えや行動が正しく誤っていないと思っても、そのことについて仲間の意見などを聞きます。自分の考えや行動が間違っていると分かったならば、その誤りを直すように指導します。

3. スカウトは礼儀正しい

スカウトは、規律正しい生活をし、目上の人を敬います。

言葉づかいや服装に気をつけ、行いを正しくします。

ねらい

礼儀を正しく、きまりのある生活をするように心掛けます。また、温かい心配りや、相手を敬う気持ちが感じられる言葉づかいと態度が身につくようにします。

また、他の人たちに不快な感じを与えないようにするために、服装に気をつけること、決められた時刻を守ることなど、規律正しい生活をし、迷惑をかけないように心掛けたいものです。

ヒント

1. 挨拶の仕方を身につけさせよう。

(1) 挨拶は、通常、年少の者から年長の者にするものと言われていますが、一般に年少者やスカウトは、挨拶する気持ちはあっても、きっかけをつかむことが下手で、言いそびれることがよくあります。このような時には、指導者の方から声をかけて、自然に挨拶ができるように仕向けると共に、スカウト仲間では、相手を見つけた方から先に挨拶することを教えます。

(2) 礼をするときには、相手の敬う心が形に表れるように指導します。心は形に表れるものですから、気をつけてしっかり身につけさせます。

(3) 挨拶の仕方は、時と場合によって変わることを分かせます。特に、慶弔の場合には、守らなければならない心得があることを説明して、機会が得られればその場に参加（参列）して、経験を積ませるのも良い方法です。

2. 言葉づかいに気をつけさせよう。

(1) 自分だけが、いい気になって話しても楽しい会話にはなりません。相手の考え方をよく聞き、立場を理解して、話し合いが終わった時に、さわやかな思いと、有意義な結果が残るようにします。

(2) 仲の良い友だち同志であっても、自分に過ちがあれば、ごめんなさいと素直にあやまることが大切です。「親しき中にも礼儀あり」と言われていることは、よそよそしいとか、かた苦しいということではなく、馴れ合いに陥ることを戒める教えです。

3. スマートネスを心がけよう。

- (1) ユニフォームを身だしなみよく着たり、言葉づかいや動作などを、マナーに合わせてきちんとしていること（スマートネス）は、スカウトの品性を高めることにもなります。

見えるところだけで判断しがちな外部の人々から、スカウト運動がどう思われるかを考えて、たいしたことではないと思われる小さなことにも注意して、良いスカウトになることを心掛けます。

- (2) 電話をかける時、まず自分の名前を告げることも礼儀の一つですし、扉の開け閉めにも、その人の人柄や感情があらわれます。ちょっとした気配りが大切なことを気付かせます。

まとめ

スカウトは、ありがとう、お願いします、失礼します、などの日常語が、ごく自然に使えるようにすることです。スカウトたちは、大人の姿を見て育つものですから、指導者がまず模範を示してスカウトたちを導くことが大切です。

「スカウトは兄弟である」と言われていますが、その言葉に甘えて、ややもすると礼を失することのないよう常に反省させて、なにげない行動の中に、スカウトらしさが感じられるようにしたいのです。

4. スカウトは親切である

スカウトは、すべての人の力になります。

幼いもの、年寄り、体の不自由な人をいたわり、動植物にもやさしくします。

ねらい

スカウトは、いつも思いやりの心を持ち、困っている人や弱い人たちに、進んで力をかすことも大切な心構えのひとつです。それには、いつでも役立つことができるように、心の準備と技能を、しっかりと自分のものにしておくことが必要です。

また、動植物に対しても、やさしい気持ちで接し、大切に扱うことによって、心がやわらぐようになります。

ヒント

1. 力の弱い者をいたわろう。

- (1) 困っている時に助けてもらったり、励ましを受けたことは、誰にもあったことと思います。その時の有難さ、うれしさは、忘れることはありません。自分が受けたいたわりや励ましを、他の人にも同じようにしてあげることが、温かい心の交流につながるものです。
- (2) ともに遊び、ともに語り合う中で、教え合い、協力し合うことが大切です。そうすれば、力の弱いスカウトが少しずつでもスカウトらしい力を身につけ、良いスカウトとして育てていくのを手助けすることになります。

2. 老人を敬う心を養おう。

- (1) お年寄りは、現在の社会を築いてきた先輩であり、長い年月の間に体験された多くの優れた知識や、技能を持っています。その尊い体験を聞いて、明日の社会を築く糧とします。
- (2) 老齢のために、体が弱くなっている人には、いたわりの心をもってお世話するようにします。

3. 病人や体の不自由な人の手助けをしよう。

- (1) 相手の状況をよく見て、今は何が必要なのかを尋ね、自分の力で力になるようにします。
- (2) 体の不自由な人には、例えば、歩道に段差があるときは車椅子を持ち上げるなど、本当に必要なことについて、心のこもった親切をします。

4. 動植物をいつくしむ心を養おう。

- (1) 生きているものを愛するということは、動植物のいのちを身近に感

ずることであり、自分や他のものの限りある生命を大切にすることになります。

(2) 名も知らない雑草にも、いのちがあります。意味もなく折ったり、傷つけたりしないようにすることです。

5. 親切をしても報いを求めない。

(1) ボーイスカウト運動が、アメリカに伝わるきっかけとなった「霧のロンドンのアンノウン・スカウト」の話のように、どんな時にもスカウトは報いを求めることはありません。

まとめ

「人のお世話にならぬよう、人のお世話をするよう、そして報いをもとめぬよう」

これは、少年団時代の後藤総長が、当時のスカウトに心の持ち方として示された教え——自治三訣（じちのさんけつ）です。

社会は、共存と相互信頼によって成り立っていることを忘れず、親切の実践が「いつも他の人々をたすけます」という「ちかい」の精神と、スローガン「日日の善行」に沿うものであることをわからせたいのです。

5.スカウトは快活である

スカウトは、明るく、朗らかに、いつも笑顔でいます。
不平不満を言わず、元気よく、進んでものごとを行います。

ねらい

スカウト章に「そなえよつねに」と記してある巻物と言われている部分は、微笑みをたたえたスカウトの口もとを表しています。スカウトらしい心の豊かさが表れて活動する姿の一つが快活です。どのような困難や失敗にもくじけずに、快活な心を失わないことが、スカウトに求められています。

Scouting for Boys (初版)に「スカウトは、どのような困難に出会っても快活、笑って口笛を吹く」とあるように、明るさを失わず、自信を持って目標に向かって進むように導きたいものです。

ヒント

1. 明るく、朗らかに過ごさせよう。
 - (1) はきはきした言葉づかい、明るい返事、速やかな対応は、相手に良い感じを与えることをわからせます。これらのことが良い習慣となつて、軽快な行動がとれるようになります。
 - (2) 胸を張って力強く歩けば、心も落ちつき、ゆったりした気分になつて、心の豊かさが表れるものです。
2. 努めて喜びを見つけよう。
 - (1) 心に不平不満があると、それが態度に表れて見苦しいものです。笑顔で人に接すれば、周りの人をなごやかな気分にします。
 - (2) 気分が朗らかであれば、働くことにも喜びが増すものです。さわやかな気持ちで日々を過ごすことができるように努めます。
3. ユーモアのある生活を心がけよう。
 - (1) いつも明るい笑顔を絶やさないことは大切ですが、意味もなく笑ったり、時や場所を考えない高笑いをすることなどは慎みたいものです。スカウトに求められているものは、周囲が明るく楽しくなるような微笑みです。
 - (2) 心にゆとりがあれば、話の進め方にも自信が現れてきます。センスの良さは日頃の心がけが表れるものですから、努力したいものです。
4. 快活と粗野との違いを認識させよう。
 - (1) 快活な行為は、周囲の人たちを愉快にし、物事をスムーズに進めるものです。反対に、粗野な行動は、人々にいやな思いをさせるばかり

りでなく、その人の人柄までも疑われることになります。

(2) 高笑いや乱暴な行いは、快活とはほど遠いものです。粗野、粗暴な言葉や行いは、本当の男らしさではありません。

まとめ

快活な言動をとるためには、いつも、おおらかな心を持っていることが大切です。これは、家庭や学校、地域社会での、あらゆる生活の体験を通じて培われるものです。

ユーモアのセンスも、このような生活の中から生まれるものであり、自ら求めて磨き上げるように導きます。

スカウトの年代は、人間形成に最も大切な時期であり、苦しむことや悩むことがあります。このような時こそ、指導者はいつでもよい相談相手となって、スカウトを励ますことができるようにしたいものです。

6.スカウトは質素である

スカウトは、物や時間を大切にします。

むだをはぶき、ぜいたくをせず、役立つものは活用します。

ねらい

豊かな生活の中で、私たちは物を大切にすることや、物には限りがあることを忘れがちです。

日本は、資源の乏しい国であり、原料の大部分を輸入に頼っているのですが、外国にも日本が求めるものが無尽蔵にあるわけではありません。

足るを知るという満ち足りた心で、日々を過ごすにはどうすればよいか、スカウトの一人ひとりに理解させたいのです。

ヒント

1. 物には、いのちがあることをわからせよう。
 - (1) どんな物でも、多くの人々の手がかかって作られたものであることをわからせ、作られた目的にそった使い方をすることが、その物のいのちを生かすことになることを理解させます。
 - (2) 人の一生の中で、今日という日は二度とない日であることを理解させます。遅刻して他の人に迷惑をかけたり、時間をむだにしないために「5分前集合」の習慣を励行したいものです。
2. 節約の意味をわからせよう。
 - (1) 物を粗末にしないためには、必要な時に、必要な物を、必要な量だけ求めて、有効に使う心構えを養います。時と場合によっては、一人ひとりが求めるよりも、用途によっては分かち合って使うことが、物を大切にすることにつながります。
 - (2) 明日に備えて蓄えることも大切ですが、自分勝手な欲望から、買いだめや買い占めをすることは、他の人の迷惑になることをわからせませす。
 - (3) 物や金銭の価値を正しくわからせ、計画的に活用するように導きます。
3. 創意工夫に努めよう。
 - (1) 私たちの周りには、古くても便利な物、安価な物でも使いやすい物など、使い方によっては役に立つ物がたくさんあります。利用の仕方を工夫して、物の価値を再発見することに努めます。
 - (2) 廃物利用など、ちょっとした工夫と、スカウト技能を生かすことによって、思いもしなかった素晴らしいものを生みだすことがあります。

す。

併せて、余暇時間の活用を考えるように導きます。

- (3) 計画的な生活をすることによって、むだを省き、必要な時間に備えることができ、心にゆとりも生まれて、将来の生活に役立つことをわからせます。

まとめ

堅実な生活とは、どのような暮らしであるかを考えさせながら、物を大切に扱い、むだをしないで節約を心掛けることが、やがて自分を豊かにすることをわからせます。そして、集会や野営などの行事の中で、具体的に体得させたいのです。

物を大切に扱う心、もったいないと思う心を育てることは、いろいろな欲望に耐える克己心を養うことであって、スカウトが社会人として独立するときに役立つものです。

7.スカウトは勇敢である

スカウトは、勇気をもって、正しく行動します。

どんな困難なことがあってもくじけずに、新しい道をきり開きます。

ねらい

スカウトは、どんな困難に出会っても、それを乗り越えてつとめを果たすことが求められています。

ひとつひとつのことをやり遂げるには、慎重な計画と周到な準備が必要ですが、それに増しても大切なのは精神力です。

困ったことに会ってもひるむことなく、これに打ち勝つ強い心と体を、日ごろから養うように努めます。

ヒント

1. 勇敢とは何かを考えさせよう。

(1) 困ったことで出会っても、弱気にならず、目的達成に励み、必ずやり遂げるには何が必要なのかを考えさせます。

(2) スカウトたちが困難に立ち向かう態度には、スカウトとしての進歩の度合いや体力によって、いろいろな差があります。指導者はこのことをよく考えて、適切な助言と励ましを与え、それぞれの目的が達成できるようにします。

2. 未知のものに挑戦しよう。

(1) スカウトは、未知の事柄や冒険に深い関心を持っています。

初めて未知の事柄や冒険に立ち向かう時には、誰でも不安なものです。事前の綿密な調査と、十分な準備によって自信を持たせ、おう盛な探究心を満足させます。

(2) どのような立派な計画でも、途中でざ折しては何もなりません。苦しいこと、辛いことがあっても、必ずやり遂げるように導きたいものです。

3. 正しい判断力を身に付けよう。

(1) 危険が予知された場合は、素早く、冷静に判断して、方針や計画を変更することも、勇気ある行動です。

(2) 自分の持っている力以上のことをして、失敗することがよくあるものです。

スカウトの行事を計画するときには、スカウト一人ひとりの経験と技能の程度を考えて、実行の可否を判断し、安全で快適な方向へ進ませます。

4. 無謀な行為とは何かを考えさせよう。

- (1) 他からそそのかされたり、単なる好奇心にひかれた行動は、勇敢な行為ではありません。それは、物事の筋道を考えない蛮勇と言われるものであって、何の意味もないことを理解させます。
- (2) 社会の常識からは考えられないような行動をして、優越感に浸ったり、その場限りの快楽を求めて危険と思われる行動をすることは、スカウトの品性を汚す恥ずかしいことであると教えます。

まとめ

勇敢な行為は、物事の本質を見極めて、良心に従い正しく判断するところから生まれます。

たとえ勇気のある行動のように見えても、他からそそのかされたものであってはなりません。

いろいろな事情から、計画通りに実行することが困難な場合でも、判断を誤ることなく、正しい道をひるまずに進んで、与えられたつとめを遂行することが、スカウトに期待されているのです。

8.スカウトは感謝の心をもつ

スカウトは、信仰をあつくし、自然と社会の恵みに感謝します。

お礼の心で、自然をいつくしみ、社会に奉仕します。

ねらい

科学技術がいかに発達しても、自然の営みは休むこともなく、絶えることもありません。

自然がつくりだす美しいもの、神秘的なものを、年齢に応じて感じさせ、自然の大きな限りない恵みをわからせて、自然に対する畏敬の念を育てたいのです。

また、祖先から受けついで恩恵や、先輩、知人、友人から教えられ、導かれたことを思い返しなが、報恩の心を育てたいものです。

ヒント

1. 自然の恵みを知り、自然を大切にすることを培おう。
 - (1) 大自然の恵みがあってこそ、我々が生きていけることをわからせませす。
 - (2) 自然を大切にすることが忘れられてきたようです。風の音、虫の声に耳を傾けて、自然の変化にも気づき、自然への関心を高めたいものです。
 - (3) 土の感触や、夜空の美しさを知らずに過ごすスカウトがあります。野外活動を訓育の柱とするスカウティングですから、自然の雄大さ、偉大さに接する機会を多く与えて、自然の有り難さを理解する心を育てます。
2. 祈る心を育てよう。
 - (1) 祈るということは、神(仏)の前だけで、特別に行うものでなく、日常生活の中で使っている「ご多幸を祈る」「ご自愛を祈る」また「ご全快を祈る」という言葉にも、神(仏)を通じて相手の幸せを祈る心が込められていることをわからせませす。
 - (2) 日々の生活の中で、心の奥から湧き出る感謝の祈りは、人の真心の表れであって、信仰心の第一歩です。
3. 奉仕の意味を認識させよう。
 - (1) スカウトの奉仕の根本は、「日日の善行」にあります。技能の練習を重ねることは、自分のためであると共に、他の人々への奉仕の基礎作りであって、スカウトのモットー「そなえよつねに」の精神にも、つながるものです。

- (2) 自ら奉仕の機会を求め、進んで奉仕することは、「ちかい」の「いつも他の人々を助けます」の教えに沿い、また、訓練の成果を確かめることにもなります。

日々このような活動を積み重ねることによって「ちかい」の「徳を養います」につながることを気付かせます。

4. 信仰への導きをはかろう。

- (1) 神(仏)に対する敬けんな心、人の力を超えた偉大な存在、徳のある人に対する尊敬の念を育てたいのです。

ヤーンなどを活用して、人の力を超えたものを感じさせることによって、崇高なものへのいざない、スカウトが信仰を持つきっかけとして捕らえられるように導きます。

- (2) 私たちは、多くの人々の導き、助けによって生かされていることをわからせませす。隣人を愛する思いやりの心を、慈悲の心・愛の心へと高めたいものです。

5. お礼の心を育てよう。

- (1) お世話になった多くの人々に対し、お返しをする心を育てます。

- (2) 「感謝のみを残して去る」というスカウトの教えを忘れずに、この言葉の持つ意味を理解して、いろいろな集会や野外活動を終えたときには、この教えを実践するように導きます。

まとめ

感謝する心は、言葉や行動に表れて初めて互いの心に通じ合うものです。「いただきます」「ご馳走さま」「ごめんなさい」「有り難う」などの言葉は、日常生活に潤いを与えます。

感謝する心は「誠をつくす」ちかいとおきての実践の基礎です。スカウトが、この感謝する心を、日々のスカウティングの中で、生かしていくように指導したいものです。

あとがき

おきては、スカウト運動に奉仕することを志す私たち指導者に対しても、行動の規範となるものです。指導者には、おきての実践を通じて直面する自己の偽らない姿を冷静に見つめ、常に精進と反省とが求められています。

おきての実践は、厳しいものです。私たちは、誠実でありたいと願っていても、ともすれば不誠実な行動に陥り、また、日々感謝の心で奉仕に励まなければならないのに、怠りがちになることがあります。少年たちは、指導者の人柄を直感で捕らえられます。彼らの純粋な目は、欺くことができません。私たち指導者に期待されていることは、甘えを断ち切って、スカウト精神に満ちた行動力を発揮することです。

この指導の手引きは、指導者の皆さんがおきてを実践することの大きな意義を理解され、スカウトを導いてくださる手がかりを示したものです。利用なさった皆さんから、意見を寄せて頂くことによって、改訂を重ね、スカウト運動発展の糧としたいと願っています。

昭和62年12月1日 初版発行
平成30年3月20日 14刷発行

おきて指導の手引き

発行



公益財団法人

ボーイスカウト日本連盟

〒113-8517 東京都文京区本郷1-34-3

電話 03-5805-2561(代)

ファクシミリ 03-5805-2901

1911

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY
540 EAST 57TH STREET
CHICAGO, ILL. 60637
U.S.A.

305 518015 508

LIBRARY

UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY



4 931187 650985